

令和3年度 北海道小学校長会地区活性化支援事業【実践事例レポート】

- 1 報告地区：小樽地区
- 2 事例報告学校名：小樽市立山の手小学校
- 3 報告者職・氏名：校長 日下部 匡彦
- 4 キーワード：ふるさと小樽の環境を生かした教育（特色ある学校経営）

1 はじめに

本校は平成30年に3つの学校が統合し、新たなスタートを切った開校4年目の学校である。『凡事徹底』を合い言葉に、「山の手の子」の未来を見据え、学校・家庭・地域が積極的に手を取り合い、共に成長し合いながら、学校や地域の特性を最大限に生かした教育活動を推進している。

校区には、小樽天狗山スキー場・小樽公園と総合体育館・小樽商科大学・3つの高等学校・旧岡崎家能楽舞台などがあり、教育環境が充実した恵まれた環境にある。

開校当初は、これまでの学校環境の違いから校内生活で児童同士の主張がぶつかり合う場面も多く見られたが、「協力して取り組む活動」「児童が活躍する場の設定」「互いが認め合う雰囲気づくり」を中心に、一人一人が他人のよさを認識しながら、自己有用感を高められるような授業改善に努めている。

通常学級は12学級、特別支援学級は5学級、全校児童数は415名で小樽市内では比較的規模の大きな学校と言える。



2 ふるさと小樽の環境を生かした教育

小樽市教育推進計画の中では「自分たちの住んでいる地域の豊かな自然環境や歴史・伝統・文化・産業等に理解を深め、郷土への誇りと愛着を育み、これからの小樽を担う人づくりが重要」と明記され、本市の豊かで美しい景観は、先人が厳しい環境の中で開拓したものであることについて理解を深め、児童の発達段階に合わせた本市の歴史や文化等について正しく理解し、外国人観光客や本市以外に住む方々に本市の魅力を伝える知識を身に付けることが求められている。

本校ではこの施策項目を受け、小樽の豊かな自然や教育環境を最大限に活用し、これからの次代に活躍する人材育成に向けた学校づくりを目指している。

(1) 能楽体験教室（地域の施設）

永年に渡って能楽活動の普及に尽力されている「旧岡崎家能楽舞台を生かす会」会長を講師に招き、6年生を対象に講話や、鼓の打ち方・舞台所作について実技体験の授業を行う。また、日本文化の美やわびを感じさせる所作・響き渡る音色について披露していただき、豊かな心を育成する。

650年の歴史を誇る能のこれまでの道のりと校区にある旧岡崎家能舞台を生かす会の活動が紹介されるとともに、謡と仕舞の言葉や所作の中にも、日常生活の中で聞く言葉、見る動作があり、身近に能があることを理解する。「一つ一つの動作に意味があり、体重のかけ方がとても難しかった。」など、実体験に基づく感想が発表され、ふるさと小樽を誇りに思う心が培われている。



(2) インターンシップと留学生交流（異校種間連携）

小樽商科大学やYMCA英語コミュニケーション専門学校と連携した取組で、英語の教員免許を取る学生に対し、インターンシップで児童の外国語学習に関わっていただいている。中学校や

高等学校での実習しかない大学生にとって、「小学生に教えることは、またとない機会だ」という感想がある。今後もこうした活動の中で児童には、様々な人と関わりをもちながら自分の未来を考えるきっかけの一つになることを期待している。

また、大学の学生課に留学生を紹介していただき、ボランティアで学校に訪問していただいている。留学生との交流会では外国の文化を紹介していただき、日本の遊び（お手玉・福笑い・けん玉・鬼ごっこ等）や給食の違いについて知ってもらう。今まで学習してきた英語を活用する場として位置付けている。



(3) 小樽天狗山の自然環境を生かして（地域の自然）

小樽天狗山は、標高532.4mの小樽のシンボリックな山で、冬は港の見えるスキー場としてスキーヤーに人気があり、観光道路の中腹にはキャンプ場「おたる自然の村」が整備されている。本校でも、作物の栽培・宿泊学習・環境教育・スキー学習等を教育課程に位置付けて活用している。

「於古発（おこぼち）川源流体験」は、4年生の総合的な学習に位置付けた環境教育である。海に流れ込む於古発川の下流から、天狗山にある上流に向かって、下流・中流・上流で水質や植物や水中生物がどのように変化しているのかを調べていく。川の始まりが小さな水の流れであることや、防護壁などが無い、手の加えられていない川を目の当たりにして、その違いに驚く児童が多い。



また、普段見ることのできない水中生物を捕まえることができたことや図鑑と同じ生物を発見した喜びも大きい。これからも自然を大切にし、守り続けなければならないという思いが生まれている。



(4) 硝子製作体験（ふるさと教育の充実）

小樽の硝子の歴史は、「石油ランプ」と「浮き玉」から始まり、ニシン漁の全盛期には、多くの硝子製の浮き玉を漁具として使用していた。その後、観光客を中心にレトロな街並みと共に評判となったことをきっかけに、先駆けとなった硝子工芸作家たちが小樽に拠点を求めて集まった。校区には2つの硝子製作工房がある。

小樽では小学校6年生を対象に、地場産品である工芸硝子に親しむことを目的として「卒業記念硝子製作体験」が産業振興課の事業として位置付けている。熱い硝子を吹いて形を整え、色・形・模様等を考えガラスを製作する。小樽と硝子に関する歴史も聞くことができ、小樽はなぜ硝子の町と呼ばれるのか、その時に初めて理解する児童も多い。小樽の伝統産業である硝子工芸製作を実際に体験することで、小樽の魅力の一つとして様々な地域の方々を知ってもらいたいという思いが強まっていく。

3 おわりに

本校では、多くの活動を経験し様々なことに触れる中で、一人一人の児童の主体的・意欲的な姿を引き出したいと上記のような取組を続けてきた。しかし、「WITH コロナ」の新しい学校生活では活動が制限されている。これまで同様の活動に固執することなく、児童にとって何が必要なことを考え、地域の方々とも協力しながら教育活動を工夫していくことの大切さと難しさを痛感している。